

第43回 Kozoom28 テーマ「新年初詣に思う」

清水健二

昨年の大晦日は3年ぶりに除夜の鐘を撞きに、多くの人が私の住まいに近い古刹(常光禅寺)に集まった。コロナ禍による集会制限が緩和され、先着108人は福餅を頂戴し鐘楼に昇って鐘を撞いた。私は横着して寝床で鐘の音を聞いていた。しかし翌日の元旦は早朝から近くの氏神さんと天神さんに初詣りした。今年1年を平穏で達者に過ごせるよう祈願してきた。どんな年になるか予想もつかないが、神仏に手を合わせるだけで清々しい気持ちになった。

氏神さんは家から歩いて5分もかからない八尾神社で、古代物部氏の一族であった栗栖連の祖神を祀ってきた、質素な佇まい



八尾神社の絵馬

の本殿と桜並木の参道だけの境内である。6世紀に権力を有した物部氏の一族が矢

を作っていたことから、「矢生」が「八尾」になったと言ふことらしい。この由緒ある神社に毎年、大きな絵馬が掲げられていて、私の絵の先輩K氏が奉納してきた。今年も干支「辰(龍)」を描き拝殿横に置かれていた。昨年秋に他界し遺作になってしまったが、氏はよく来年は描けなくなるかも知れないので、来年、再来年の分を描き貯めしておこうかな、と冗談を言って笑っていた。「龍」の絵をみながら、やっぱり早くから描いていたんだなと知った。氏はなかなかの漫筆家で、私に「雑誌集(肩の凝らない本で一冊)」という単行本を自費出版した上・下巻をくれた。身辺の話や古話、日常の興味深い出来事を挿絵と共に書いていて楽しませてもらった。私と相性が良かっただけに、寂しい思いをしながら絵馬を眺めた。



除夜の鐘撞き案内板

さて、昔から各神社には絵馬が架かっているが、古代には神様は神馬に乗って人間世界にやってくると考えられ、神事には白馬を献上していたという。奈良時代には木馬や陶馬が代行し、やがて板に絵を描き奉納したものが残されていてよくみかける。やがて一般庶民に広がり病氣平癒や安産、日常生活の中での願い事等々を祈願し、叶えられた時にお礼に絵馬を奉納するようになった。特に新年を迎える正月に、これからの1年間の願い事を板に書いて納める、神頼みの習慣が定着して現在に至っている。最近では学問の神様として菅原道真の祀る天満宮は、受験期の学生が合格祈願に押し寄

せるので大変な賑わいとなっている。

絵馬がその年の干支の動物にすり替わって描かれるようになったのは、その年の干支にあやかって願いを込めて参拝してもらおうと、神社側が屋根付きの大きな板に絵を描き飾るようになった。今年は「辰年」で、龍は吉祥の神獣として運氣上昇と、自然界で水を司る龍神として祀られている。例えば奈良・法隆寺の中門正面の手前に在る手水舎には、立派な石造の龍の全身像が鎮座し、清めの水を吹き出し水神としてその役目を果たしている。



法隆寺の石造龍

龍は12の干支の中で唯一架空動物だから、絵馬に描かれる龍は作家のイメージが表現されるので興味深い。私は足を伸ばして絵馬探訪をしてきたので、それらの中からご紹介してみたい。

①は八尾神社に掲げられたもの ②は八尾天満宮のもの ③は道明寺天満宮のもの ④は奈良・橿原神宮の巨大絵馬(幅5.4m 横4.5mで日本画家藤本静宏氏による作品)である。



八尾神社の絵馬



八尾天満宮の絵馬



道明寺天満宮の絵馬



橿原神宮の絵馬

一般参詣者が奉納する小絵馬には、願いや謝礼の文言を書いて奉納するが、一方みくじを引く人も多い。しかも最近特に増加してきているように思える。前述した八尾天満宮はみくじを引いたあとの紙片をくりつけるよう掛け縄を張った光景に出会うようになった。自分のこれからの運勢を案じたり、願いが叶うにはどんな行動をとればよいのか、神仏からのメッセージを求めてヒントやアドバイスを期待してみくじを引く、いわばささやかな行為である。どんなに科学技術が進歩しても一寸先は暗闇である。今年元旦から能登地方の大地震が発生し大惨事となった。自然の脅威には手の施しようはなく恐れをなした。2日には羽田空港での航空機の衝突による炎上事故があった。これは人為ミスらしいが、幸いに乗客、乗員全員が助かったという幸運に恵まれた。人間の運命など全く予見することはできないものだとつくづく認識させられた。それだけに誰も神仏にすがりたい気持ちは共通している。無信仰の人でも正月には寺社にお参りし、救われたい気持ちなるのは人情というものだろう。



八尾天満宮のみくじ掛け

絵馬を奉納したり、みくじを引いたりする行為は、占い師が行う伝統的な占いとはちょっと違って、気軽に楽しむ日本の微笑ましい文化だろうと私は思っている。吉と出ようが凶と出ようが、みくじに書かれた文言は大抵教訓的で、しっかり生きていくなだよと告げているようである。近年みくじを引く人が多くなってきたのは日本社会の変調の表れかと感じている。高齢化による健康や経済的不安、若い担い手の人口不足、職業での格差社会等々による社会・経済の低調さが影響していて、不安の表れの現象かなと思えてくる。

3年半に及んだコロナ禍は、人々の日常を大きく変化させた。若い男女とも晩婚化が急速に進み、結婚や出産への意識、行動面の価値観が変わり、今や1人の女性の出産数は1.3人を割って生まれる子供は年間80万人以下となったという。50年前のベビーブームには200万人を超えていた時代の4割以下である。このまま推移すれば国力の低下は免れないだろう。少子化の抜本的な国策が求められる時代に入っているが、公的支出での対策をやかましく言うだけでなく、国民全体が暮らしのあり方を識者と共に知恵を出し、変革へ大きな一歩を踏み出す年にしたいものだと願う新年である。

令和6年1月 記